



TITLE:

隕石「浦崎號」について

AUTHOR(S):

本田, 實

CITATION:

本田, 實. 隕石「浦崎號」について. 天界 1938, 18(206): 246-249

ISSUE DATE:

1938-05-25

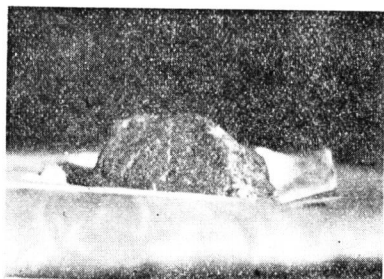
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167673>

RIGHT:

隕石「浦崎號」について

● 瀬戸 本田 實



山本一清先生の「日本に於ける隕星一覽表」(花山ブレン第306號)に第95番として、又は神田茂氏の「日本隕石一覽表」(天文月報第26卷第6號)の中に第64番として、この“浦崎隕石”が登録されてあります。

この隕石については“地球”第4卷第5號に簡単な記事があり、地學雜誌、又天文月報に、其の記事が轉載されてゐるが、其他の詳細は不明であります。相悪く、地球誌が手もとに無いので、その轉載されてゐる天文月報をさがし出してみますと、第19卷第3號に次の如き記事が載つてをります。

“地球第4卷第5號及び地學雜誌大正14年12月號によれば、大正14年9月13日、廣島縣沼隈郡浦崎村字滿越 583 番屋敷へ隕石が落下したのを納涼中の佐藤 様次郎氏が拾得した由、隕石は三角形で長さ6寸重量400匁であると。”

この記事を読んでから、急にこの“宇宙の便り”、“手に取つて見られる星”が見たくなり、瀬戸の近くの浦崎村の村役場へ照會しましたところ、まことに偶然にも同役場内の桑田氏から、隕石は保管してあり、且つ“私の妹が落下の實況を實見してゐるから、いつにても來るやうに”とのお返事をいただいたので、過日同地へ參つて、隕石を見せていただき、落下の實見者である佐藤富江嬢に落下地點まで案内していただき、當時の状況をお聞きしたところと、隕石を見ましての二三の私の感想を記させていただきます。

當時實見者である佐藤富江嬢は未だ小學校へ在學中でありましたが、大音響と共に、火粉を散らして飛んできた隕石落下のこの現象が、あまりにも特異なものであつただけに非常にハツキリと焼けつく如く(同嬢はそう云はれます)憶へてゐていただいたので、かなり詳しいことまでお聞きすることが出來ましたのは、非常に幸でございました。

大正14年9月13日(1925)は残暑未だきびしく、朝から非常に良い天気で又蒸し暑い日でございました。赤い夕陽が西の山にかくれると涼しい潮風が夕闇をのせて吹いて参ります。富江嬢は祖父梅次郎さん(先年他界)と近くの嚴島神社の境内で常夜燈のかけに涼をとつてゐました。あたりは未だ明るく人顔など良く分る頃でございます。

突然天の一角に非常な物音が起りました。雷のやうな、太砲のやうな、そしてそれが重爆撃機が非常な低空を飛ぶが如き激しさでございます。

驚いた富江嬢は、二三步海岸の方へかけ出して、音のする天の一角を見上げました(北々西約30°の高さ)。そこには大きさは満月よりも稍小さいけれど、火粉を伴つた火の玉が(丸くなく角々しい)しかも遠くなく屋根の一角に見えました。あつと思つた次の瞬間、約15米前方の波打ちぎわに激しい物の落ちる音をききました。しばらくお祖父さんも富江嬢も呆然としてをりました。約15分立ちました(之は富江嬢のお話そのまゝですが私はこんな場合15分は長すぎると思ふ。せいぜい5分乃至10分はたかない時間であつたであらう。だが然し落下直後でない事は事實である)。二人はおそろおそろ行つて、落下した怪物を拾ひあげました。怪物は約30cm



落下時の姿勢(當時を思ひ出していただいて撮つたもの)

位の穴をあけて、その附近の砂を少し焦した如くなして落ちてゐました。拾ひ上げてみますと、まだ暖かく熱があります。手の上へのせて熱いなと思ふ位の熱でございます。でも、あまり大した石でもなさそうなので、梅次郎おぢいさんはもつて歸つて庭へぶつけておきました。二三日そのまゝでおきましたが“星を拾つた”と云ふので評判が高くなり、急に箱を作るやらして、大事に保管することになつたのでございます。以上が大體富江嬢の當時のお話でございます。次に之を要約いたしますと、

落下日時 1925年9月13日17時30分頃

落下地點 東經 133°15' 30"

北緯 $34^{\circ}22' 2''$ (參謀本部5萬分1
の地圖より)

方 向 北々西 約 30° 位の高さより来る

光 度 明るし

大 き さ 満月より小

形 丸くなく、^{かま}角々しい

色 赤い、焼火の如き色

音 響 大砲の如き性質にて、重爆撃機の
低空飛行の如く激し

熱 持つて見て熱いと感ずる程度

次に實物についての私の調査と意見を一寸申上

げてみます。

重 量 1.414^{kg} (拾得後少しけづり取られてゐる)

比 量 2.6

大 き さ 長さ, 18.5^{cm} . 幅, 8.3^{cm} . 高さ, 8.5^{cm} .

尙隕石を手に取つてみますと、裏面は焦茶色で平たく、背面は又、黒く少し
焼したやうであり、正面のみは(寫眞参照)一旦白熱して冷却したものゝ如く白
色を混へ(厚さ2.0mm)、又一面ではないが非常にたくさん水晶様の結晶があり
ます。

思ふに、この隕石は(之は非常に大膽な意見ではありますが)、かなり低空に
來てから爆發せるものであると思考出来る。それは前にも述べた如く一面を残
して他は普通の岩石の破片の如くであり、それが低空で行はれたと云ふ論據は
その爆發した一面が地上に落下するまでに白熱し得ず少々焼したる程度に終り
たることである。

又比重が2.6にて、神田清氏がその著書の中で述べてゐられる如く“石質隕石
の比重の多くは3.5位で、地球の表面の岩石と大差がない”とある如く3以上に
出ないので不思議にも思はれるが、大音響と共に天の一角から轟然と落下して
來た事實に對しては頭を下げざるを得ないであらう。

以上が大體この隕石に對する今日までの調査であります。尙、浦崎村は瀬戸



落下現場に於ける拾得者
佐藤富江嬢と隕石

内海の白砂青松の地、非常に風光明媚の所です。隕石も心ありしか、この地を選んだのでありませう。

尙一言つけ加へて置きたきは、この隕石落下の實見者である富江嬢は當時この隕石落下を見てから何とも形容出來得ないなまぐさい臭ひに悩まされて、10日間ばかり食事がすまなかつた由である。今でもこの隕石を臭ぐと、その臭ひがするやうだとのことにて、私も手に取つて見しに、心なしか何かなまぐさい臭ひがしたやうであつた。之は隕石に起因するかどうか全然不明のことです。

獨 國 で 新 し い 月 名

何でも、かでも、國粹ドイツ精神でなければならぬヒトラー政権下では、一年中の月々の呼び名までも、古風のドイツ名に變へて了つたといふ。即ち下の如し：

一 月	“Eismonat”	(氷の月さいふ意)
二 月	“Hornung”	(鹿が角を無くする月)
三 月	“Lenzmonat”	(春の月)
四 月	“Ostermonat”	(復活祭の月)
五 月	“Mai”	(之は元のまゝ)
六 月	“Brachet”	
七 月	“Heumonat”	(乾草の月)
八 月	“Erntemonat”	(收穫の月)
九 月	“Herbstmonat”	(秋の月)
十 月	“Weinmonat”	(葡萄酒の月)
十一月	“Nebelung”	(霧の月)
十二月	“Julmonat”	(主の降誕の月)

ち よ つ と 紹 介

南大阪の“天文讀書會”といふ會から“天文”といふ雑誌が5月1日附で創刊された。非常に變つた型の雑誌で、一寸、正體がつかみにくいので、批評したいことは山ほどあるが、皆、後日にゆづる。